る心所の定義と厳密に比較研究することによって、Dipa の教系上の位置や成立年代が明かになってくるであろう。この様な方法によって今まで明かになってきたことは、Dipa は正統有部の立場に立ち倶舎論を批判して、更に順正理論をも超えようとしていること、入阿毘達磨論と直接の教系上の関連があること、大乗諸論書の影響が認められ、そのため成立年代もいくぶん後期であることが予想される等である。

この様な方法が Dipa のあらゆる面にわたって試みられるならば、教系や成立年代のみならず、その著者までがはっきり判明する日が来るであろう。それらの試みについては今後の課題としたい。

古代王者の一性格

佐々木令信

自然現象の調和をはかり五穀豊饒をもたらすべきものとして古代王者は期待された。『魏志』東夷伝・夫余条に、

旧夫余俗、水旱不調、五穀不熟、輒帰咎於王、或言当易、或言当殺、

とみえる如き重責・苦悩を負うていた。古代の農耕社会にあって、それは王者の当然具備していなければならない条件であった。古来、支配者の基不的パターンは、殷代の卜辞などに示される如く、雨帝としての性格をまずもち、次第に風を支配する属性などの保有・拡大がみられ、王権が宗教的権威にもとずいていることがしられる。

フレーザの『金枝篇』によれば、エジプトの上ナイルの諸部族では、呪医者が族長であり、その権力は雨乞いにもとずいているという。また、白ナイル谿谷の独立諸部族集団であるデインカ族の酋長とか族長と呼ばれる権威者たちは、実際その部族ないし共同社会の事実上の雨師あるいは素質上の雨師であるという。未開社会にあっては、雨師なるが故に族長となったり巨大な富を貯えたりする例が多くみられる。

しかし一方、雨師としての権能が充分発揮されなかった場合、追放されたり殺されることを前提としていた。マックス・ウエーバーによれば、中国の君主は呪術的宗教信仰の古代的な『雨乞師』であり、カリスマ的支配の古来の純正な意味において天の加護ある君主であった。しかしそれは同時に、天の是認された支配者の資格のあることを、民衆の暮しの安泰によって証明しなければならなかったのであり、河川の氾濫や、犠牲を捧げたにもかかわらず雨の降らなかった時などには、皇帝が天の要求したカリスマ的資質をもたぬものとされた。皇帝の最後のたのみは自分の罪を公然と懺悔することであり、それさえも効果のない場合には、退位を、往時にあっては自分の身を生贄に供することを覚悟しなければならなかった。(木全徳雄訳『儒教と道教』)

湯王が夏を滅ぼして、天子の玉座に登ってまもなく、七年もの日照りが続き、河川の水は枯れつき、石も砂も溶け去らんばかりとなって、人民は毎日苦しんだ。雨乞いをしても効果がなかった。

史官が占いを立てると、「人間を犠牲とすれば、雨が降る望みがある」とでた。「雨乞いは本来人民のため、人間の犠牲が必要なら、自らがなろう」と湯王はいい、身に粗布の衣服、手に一束の白茅をもち、白色の車に乗った。人々は三足の鼎をかつぎ、旗、のぼりをうち振り、音楽を奏して前を行き、その後を湯王の馬車がゆっくりと行進した。行事中巫師は特別の格式の整った雨乞いの祈禱文を声高く朗誦した。殷民族の神社・桑林につくと湯王は車をおり、神壇に進み、黙々と上帝（神）に祈禱し、「私一人が罪を負います。万民に罪を及ぼさぬよう、もし万民に罪あらば、みな私一人の身に着せて下さい」というような言葉を述べたのち、鋏で髪を、さらに長く伸ばしていた指の爪を切り、一度に神壇の前のかがり火にくべて焼いた。間もなく四海雲が群がり寄り、千里の雨が滝の如く降り、七年の日照りは一朝の間にあとかたもなく消えうせたのだという。（袁珂『中国古代神話』）髪や指の爪を切り神壇の前のかがり火にくべて焼く行為によって、湯王は人民のために自らの身の犠牲を惜しまぬことを表明したのであった。

わが国にこれに類した古代王者の神話や歴史的事実の可能性についてはにわかには判明しがたい。少しく考える素材として二つの史料をあげることにしよう。

㈠ 『日本書記』仁徳天皇十一年十月条。

以築二茨田提一。是時、有二両処之築而乃壊之難レ塞。時天皇夢、有レ神誨之曰、武蔵人強頸・河内人茨田連衫子二人、以祭二於河伯一。

㈡ 肥後国水股の雨乞習俗（古川古松軒『西遊雑記』）

此節数日雨降らずして井水もなきくらひにて、数十箇村申合せて雨乞有り。土人の噂をきけば龍神へ人柱を立ていけにへを供すと云。珍らしき事なれば一見せんと思ひ其地に行見るに、海岸にかけ造りのこ屋をたて、藁にて長一丈ばかりの婦人の形をつくり、紙を以て大ふり袖の衣裳をきせ、それに赤きもやうを画き、髪は苧を黒く染て後へうち乱し、させ村役人・社人・巫女・見物人彼是数百人群集し、其中の頭と覚しき社人海上にむかい、至て古き唐櫃のうちより一巻を取出し高々とよみあげし事なり。其祭文の文章甚埒なき事ながら、かな書の古文章と思はれ侍りしなり。其後は太鼓を数々たたき大ぜひ同音に唱へるには、龍神龍王未神々へ申す、浪風をしづめて聞めされ、姫は神代の姫にて祭り、雨をたもれ雨をたもれ、雨がふらねば木草もかれる、人だねも絶へる、雨をたもれ、姫おましょ姫おましょ。かくのごとく入かはり入かはり雨のふるまでは右の通に唱へて、雨ふる時はかの藁人形を海へ流す事なり。右文句を大ぜひ高声にいふ時に、傍よりひやうしをとりて、いかにも〳〵と云。土人の物語は、二百年以前には数十ヶ村の娘を集てくじ取をさせ、くじにあたりし娘は右のごとくして海に入れしと云。辺鄙の地にはいろいろのおかしき例も有る事にて、古しへの事を伝へてうしなわず。（『近世社会経済叢書』九）

㈠の史料は五世紀半ばのこととして記されている伝説、㈡の史料は天明三年（一七八三）の九州巡歴記である。このまま事実として理解できるか疑問にしても、各地に伝わる人柱伝説と考えあ

わせ人身犠牲の可能性は十分あるといえる。また、例えば、タムムズ（メソポタミア・エレク王朝第四世）が旱魃のとき、殺され河に流されることによって河神の心を和らげ人民の犠牲となるというような古代王者の悲劇を直接伝えないにしても、そのことを予想せしめる可能性をひめたものであろう。

皇極天皇元年（六四二）の旱魃のとき『日本書記』によると、㈠「殺二牛馬一、祭二社神一」㈡「移レ市」㈢「禱二河伯一」㈣祈二三宝一㈤「天皇幸二南淵河上一、跪拝二四方一。仰レ天而祈。」という五種類の祈雨が行なわれている。即ち、㈠㈡㈢の民間信仰による祈雨儀礼、㈣の蘇我氏の仏教による祈雨、㈤天皇みずからが明日香南淵の河上で天神地祇に祈る、である。この場合、シャーマン的性格をもつ皇極天皇が、司祭的権能を示すことにより「天下百姓」をして「至徳天皇」といわしめた。もっとも百姓にとって天皇と蘇我氏の政争には無縁のことであり、自然現象を調和し五穀豊饒をもたらす古代王者を待望したのであった。

西アジアの古代伝説によると、旱魃が続いて五穀が枯死せんとするようなときには、若君の神に粉装する王子が犠牲となって死ぬことを要求され、少なくとも劇的に死んで、実際には牡牛が牲犠にされたという。（土居光知『古代伝説と文学』）すなわち、後世になると、王者の身代りとして動物が犠牲にされ、或は芝居のうえで死ぬ儀礼が行なわれるようになったのである。わが国において人身犠牲が実際に行なわれていたのが、今日詮索出来る範囲においては、先にあげた皇極元年の祈雨儀礼としての殺牛信仰などの動物犠牲や、藁人形に代用される儀礼や、身振劇として痕跡をとどめているにすぎないのである。

真実開顕の機

――韋提希の問――

本多　恵

宗教的要求の成就、即ち人間成就の具体的展開を開示するものに『観無量寿経』がある。此の『観経』は「実業の凡夫」たる韋提希の問を縁として十六の観法が教説されるのであるが、その韋提希の個人的なる問が遂に普遍的なる教を、釈尊をして説かしむるに至った所以は如何なるものであろうか。

韋提希の問とは、

「我宿何罪、生死悪子、世尊復有、何等因縁、与提婆達多、共為眷属」

である。善導は『観経疏』において、この問をことのほか重視する。表面的には「我宿何罪、生此悪子」と、「世尊復有、何等因縁、与提婆達多、共為眷属」という二つの問であるが、善導は一つの問の二重性であると見取っている。前者は自身を問い、後者は変形された形ではあるが仏を問うことである。つまり問の二重性とは、自己を問うということが、仏を問うことを必然さすものであり、自己は仏が明らかにならずしては明かされることは無いことを意味するものである。

先ず自己を問うということの内容は、善導が、